

世帯と人口

(平成5年1月1日)
世帯 37,612 (+125)
人口 109,940人 (+205)
男 56,805人 女 53,135人

広報えびな

編集・発行
海老名市役所広報広聴課
〒243-04
神奈川県海老名市勝瀬175
☎ (0462) 31・2111



見あげてごらん冬の空

輝き増す星々…いまが一番

冬は、一年中で一番空気が澄んでいて、星が最もきれいに見える季節です。みなさんも、ちよつと外に出て夜空を見あげてみてはいかがですか。きつとたくさん星の星座があなたに語りかけてくれることでしょう。

高橋さん(中央)の長年の夢がかなって屋上に設置した口径40cmの天体望遠鏡

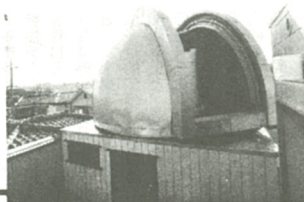
星座を探そう

南の夜空を見上げると、どの星よりも明るく輝く青白い星(おおいぬ座のシリウス)・オレンジ色の星(オリオン座のベテルギウス)・白い星(こいぬ座のプロキオン)の三つの星が目に入りま



この三つの星を結んでできる大きな三角形を「冬の星座を観察するときの目印」になります。

【オリオン座】オリオンは、ギリシャ神話にでてくる巨人の狩人です。左手にししの毛皮の盾を、右手



屋上で観望がましい

自宅の屋上に天文台を設置した高橋典嗣さん(東柏ヶ谷、34歳)
小学四年生のとき、初めて手にしたのが四折の屈折望遠鏡。「土星には、本当にきれいな輪がついている…とひとりで見つけた宝物のように感激しました」以来、もっと大きな望遠鏡で見ればいろいろな発見ができるのではないかと、中学生のころから、家に天文台を作るため、よくノートに将来の家の設計図を書きました。その夢は去年の暮れに実現。家族からは「趣味と思っていたのに、まさか屋上に天文台を作ってしまうとは!」と…
高橋さんは、「今後は、天文台を活用して天体に興味を持っている子供たちに、天体現象の偉大さなどを知って欲しいですね」と話しています。

フォトピックス

親子96組が参加

新春恒例の「親子ジャンボかるた大会」が一月九日、杉本小学校グラウンドで開かれ、市内



親子96組が参加

20歳の旅立ち

市文化会館で成人式
一月十五日、市文化会館で成

の親子九十四組、百八十八人が参加した。この大会は、親子が手をつなぎ、グラウンドいっぱいには配られたジャンボかるたを取り合うもので、かるたを楽しみながら郷土の歴史や文化財を学ぶとともに、親子のふれあいを深めることを目的としている。今年で十六回目。左藤市長などが札を読みあげると、参加者はグラウンドいっぱいには散らばった絵札に向かって突進、中には別の絵札を取る親子もいて、会場は終始、笑い声と歓声に包まれた。



久しぶりの再会に会話も弾む

消防演技を披露

市役所西側広場で出初式

一月十四日、市役所西側集会所広場で消防出初式が行われ、市消防署、市内全消防団、事業所などで編成された自衛消防隊などが参加した。

会場では消防団の分列行進に引き続き、消防団員の永年勤続表彰、人命救助や初期消火活動を行った一般市民への感謝状の贈呈が行われた。

消防演技では、(株)ダイエー海老名店女子自衛消防隊の屋内消火栓操法や(株)パブコ相模工場自衛消防隊、第十一分団(上河内・杉久保)の消火操法が披露された。最後に市消防署の演技が行われ、小雨の降る中出場した約三百人の市



第10分団による消防演技

海老名おかしおかし

電話で海老名の昔ばなしが聞けます。

1月19日～2月3日 第10話 狐に育てられた娘
1月4日～2月18日 第11話 白鶴の精



市庁舎で弦楽4重奏の演奏が...

優雅な昼を満喫

市庁舎でミニコンサート

一月十三日、市庁舎一階ロビーで「TOKYO YSCLEUB」トニー・ウィズクラフ・佐々木雄一代表20人のメンバーによる弦楽四重奏の「ミニコンサート」が行われた。同クラブは、四年前に結成されたもので、クラシックはもとより、ジャズやポップスなど幅広いジャンルの音楽を各地で演奏している。クラブのメンバーに海老名出身者がいて、市役所を訪れる人に私たちの音楽を楽しんでもらえれば」と今回実現の間に、七曲の演奏が行われたが、ロビーには来庁者など約百人が足を止め、優雅な昼のひとときを楽しんだ。

海老名おかし

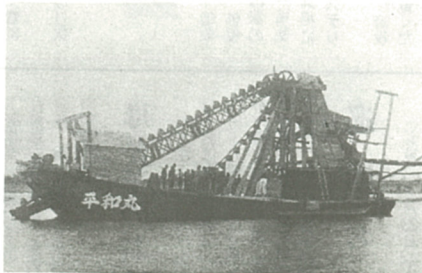
第295話

大水の恵み

洪水余話 その2

相模川の水は農作物に被害を与えたりばかりでなく、沿岸住民の生命財産をも脅かした。その反面、素晴らしい恵みをもたらしている。

俗に「海老名三千石」と呼ばれた大々倉地帯を沿岸に形成したのは、有史以前から繰り返されたものである。川の洪水のたまものである。弥生時代からの金田沃野を母体としての米作、その恩恵は計り知れないものがある。このことは今更取り上げる必要もないので、以下は今日的な利得に触れていきたい。



昭和25年ごろの砂利採取船。写真は相模興業(株)提供

このころはまだ、手掘りした砂利を手ふるいで選別して、農閑期の賃稼ぎにこの仕事を通っていた人もいた。戦後は直接現場へ横付けできる便利さからトラック輸送となり、手ふるいが可搬式簡易砂利採取機に変わり、やがて砂利採取船の数も増えて大量に採取されるようになった。

昭和三十三、三十四年、横浜新道建設工事に砂利六千六百立方メートル、横浜シルクセンター新築工事に砂一万立方メートル、ともに上郷産のものが使われた。昭和三十四年、横浜新道建設工事に砂利六千六百立方メートル、横浜シルクセンター新築工事に砂一万立方メートル、ともに上郷産のものが使われた。昭和三十四年、横浜新道建設工事に砂利六千六百立方メートル、横浜シルクセンター新築工事に砂一万立方メートル、ともに上郷産のものが使われた。

洪水で資源だった。まだ道路舗装が施されていなかった大正末期から戦前にかけて、国分には「砂利敷き」という役があつて、一戸当たり石油箱二杯分の砂利を、河原口の河原から荷車で運んできて道路に敷いた。昭和四十三年、私が区长だったころは、場所と必要な砂利の量を町に申し出れば、町費で運んでくれるようになった。ぬかるみ道は、このように砂利に頼っていたのだ。

上郷では、昭和八年ごろから権利者八十八人の総会の決議によって業者と契約した。当時権利金は大体年間七万円だったが、これは大分年間七万円が始まりという。大正十五年、相模川から河原口まで延長された小田急線が敷設、それそれ京浜の需要地へ貨物輸送を始める。市域の砂利採取も活発

た。この事をもて、我が海老名産の砂利、砂がいかに近代建築などの骨材として世に大きく貢献したかがわかる。しかし、この需要は洪水による補給では追いつかず、そのため川床は低下し橋脚の基礎は露出するようになった。そこで昭和二十九年四月、相模川の砂利採取を全面禁止にした。これによって一時百数十社に及んだすべての業者が撤退し、全国的に名声を失った相模川産の砂利は姿を消したのである。

流木もまた、洪水の恵みの一つである。上流津久井の材木業者は運送費節減のため、洪水という木材に刻印を打って放流した。太いものは径一メートル以上、後日引き上げにきた業者は、若干の礼金を置いていった。下今泉のある老人は当時の様子をお話している。「上河原の土手切れたとき、今の国道二四六号線の南側の堤防が入り込んでいる所へ、おりからの西風によって木材がおよそ百本吹き寄せられた。径二尺(約60cm)、長さ二間(約3.6m)ぐらいいり、その上をあらわら飛び移る冒険遊びをした」

(池田 武治)